

第42歩

「10分間の大花火」

10分間という短い間、クライマックスの連続で、華やかで賑やかな花火でした。そして、終わった後は儚さが際立ちました。

高松の夏の風物詩「第56回さぬき高松まつり」が今年は三日間の全日程において開催され、ほっとしています。特に花火大会は、悪天候とコロナ禍による中止が続いたため、実に5年ぶりの開催であり、多くのファンが待ちに待った再開でした。ただし、主たる観覧場所であったサンポート高松の広場には現在、県立アリーナが建設中で、従前以上の混雑と混乱が予想され、中止も検討されていました。しかし、多くの人々の花火に懸ける思いは強く、さわりだけでも実行できないかと、3000発の花火を10分間に凝縮して打ち上げることとなったものです。また、演出として初めて音楽とのコラボレーションが試され、エドワード・エルガー作曲の行進曲「威風堂々」の荘厳な響きに合わせて次々に華麗に花火が舞い上がりました。結果、例年より少なめとはいえ、約12万人もの皆様に高松まつりの花火を楽しんでいただきました。

見物客の皆様の声を報道から拾ってみると、「音楽があって、花火が舞って迫力があつた」、「今年の夏で一番綺麗な花火だった。感動した」といった称賛や「もう少し見たかった」、「10分は短いなあ」といった感想をいただいています。こうした声を来年以降の展開に役立てたいと思います。

そして、毎年花火大会に合わせて高松港に入港していた日本最大のクルーズ船「飛鳥Ⅱ」も今年はお約束通り、横浜から駆けつけてくれました。初めて入港した時、乗船員の方が、「自分は世界中の花火を見てきたが、これだけ間近に見ることのできる高松の花火が一番だ」と言っていました。もちろん今年も乗船客は、デッキから花火を間近に見て、大喜びだったということです。

猛暑日が続いた今年の暑い夏。夜空に開いた大輪の花火は、10分間という短い間だったからこそ、余計にその儚さを際立たせて散っていきました。それではまた来年、と余韻を残して。

